

- 1、新約聖書のイエスの復活物語には「空虚な墓の物語」(マルコ)と「復活したイエスとの出会いの物語」(ルカ)がある。ヨハネの復活物語は、この二つが並列している(1-10、11-18)。自分なりの過去のイエス理解(しがみつきの)が砕かれ、新しい出会いや関係へと導かれる物語である。
- 2、「空虚な墓」で二人の弟子はイエスの遺体の不在を確認するがその出来事の意味を悟らない(9節)。マグダラのマリヤはイエスへの思慕、思い入、親愛の情のゆえに、途方にくれて泣き崩れる。マリヤは「わたしの主が取り去られました。どこに置かれたのか、わたしにはわかりません」という。「わたしの主」とは主観的過去像のイエス。戸惑いの表現。「だれを捜しているのか」の声。彼女は「あの方を(気持ち、認識、理解で抱いている)」という。彼女の位置から「運び去られた」その方を「引取りに行く」という。自分が中心にいる。復活とは自分とイエスの位置関係の変わる事。「マリヤよ」という声は、全く違った方から聞こえてくる。「振り向くと、そこにイエスが」という位置関係。マリヤはイエスにすがりつこうとする。「すがりつくのはよしなさい」とイエス。
- 3、知らない間に、思い込んでしまっている在り方から、解き放たれる出会いが、復活のイエスに声をかけられる事。ヨハネの時代に、すでにイエスの復活について固定観念的理解があった。それに対して、ヨハネは、復活理解への鋭い批判をした。「振り向いて応える関係へ」。自分は「こうだ」との思い込みを手放す時、イエスはそこに居まし給う。これを大事にして行きたい。
- 4、キリスト教作家の椎名麟三の戯曲『天国への遠征』は人間の陥りやすい生き方を、ユーモアと鋭い風刺(サティア)で描いている作品である。舞台、枯れ木が二本と石の山があるだけ。一人の老人がボロを纏い何万年も待ち続ける。「悪魔」だとも呼ばれている。そこに三人の人物が次々と登場する。この人たちは一度死んで、それから旅をしている人達。みんな自分の身体より大きな石を背負っている。老人は、その石は自分が貸したものだから返してくれと頼む。けれど、置いて行かない。若い男は「これは自分が純粹であることの証明だから、手放すことはできない。」。次の女も「これは、わたしの誇りで、男を愛している、愛の象徴だ」。中年女は「わたしの信仰の印だ、存在証明だ」という。観客にはそれは単なる石でしかない。紆余曲折の上、三人はそれぞれ石を捨てることになる。老人は「どうやらあの方々、この死の国からの出口を見つけられたらしい。」。大変寓意的なお芝居。
- 5、私たちはふと気が付くと石を背負っている、あのこ、このこ、自分の思い込みで背負い込んでしまっている。いろいろな不安がある。その観念へのしがみつきの彼方をイエスは行かれる。復活のイエスに支えられまた一步を踏み出したい。